

社会的なバリエーション 3

サンフランシスコ州立大学／国立国語研究所

南 雅彦

アコモデーション理論

- 他の地方の友だちや配偶者と話をしている時は共通語(的)だが、電話で郷里の親兄弟と話をしたり、帰省して親兄弟と話をする際には方言を使用する。
 - 話し相手がその方言を使用できるか、理解できるか
(空間的広がり)
 - 発言する場面(場面的広がり)
 - 社会的距離:公私・年齢・立場の上下
 - 心理的距離:親しさ
 - フォーマル(上位)な場面では共通語アクセント、インフォーマルな場面では方言アクセントという切り換え
- しかし上位場面になっても、共通語に置き換えられない場合がある。これはなぜか。

アコモデーション理論

	心理的収束	心理的拡散
言語的収束	A	C
言語的拡散	B	D

(Giles, Coupland, & Coupland, 1991; Giles & Powesland, 1975)

- A. 話し手が対話相手との間に「我々」という意識を持っている。
- B. 親しくても、話し手それぞれが対話相手（または別の参加者）と異なる言語を使用する。
- C. 話し手は、対話相手と心理的隔たりがありながら、対話相手と同じ言語を操る。
- D. 話し手は対話相手と関わりたくない。

アコモデーション理論

	心理的収束	心理的拡散
言語的収束	A	C
言語的拡散	B	D

(Giles, Coupland, & Coupland, 1991; Giles & Powesland, 1975)

A 相手にあわせてものを言うという意味において典型的な例は、
B **child-directed speech** (CDS: motherese: ベビートーク: 幼児に対するもの言い)、**teacher talk** (教室での教師のもの
C 言い)、そして **foreigner talk** (フォリナートーク: 外国語学習者に対するもの言い) があり、これらもアコモデーション理論
D から説明可能。

アコモデーション理論

『リンカーン』(LINCOLN)TBS系列で放送されているバラエティ番組

関東芸人、関西芸人、両方かなりステレオタイプ的な言葉遣いを使っていて興味深い。特に常に関西弁で普段過ごしている芸人さんたちには、自然な標準語はかなり難しい様子。最後の方では完璧な関西弁のイントネーションではなくても、「笑いがとれている」ということが理由となってポイントを得ている場合もあるが、関西弁、標準語のイメージというものが「お笑い」というFilterを通して、よくわかる。

浜田「濃い大阪弁は言えないかもしれない」

松本「**浜田さんなんて、心も離れてますもんね**」

浜田の「濃い大阪弁は言えないかもしれない」に対して、松本が「浜田さんなんて、心も離れてますもんね」が言ったところが、**アコモデーション理論** (accommodation theory) の**言語的拡散** (linguistic divergence) ばかりでなく (関東弁に) **心理的収束** (psychological convergence) している。

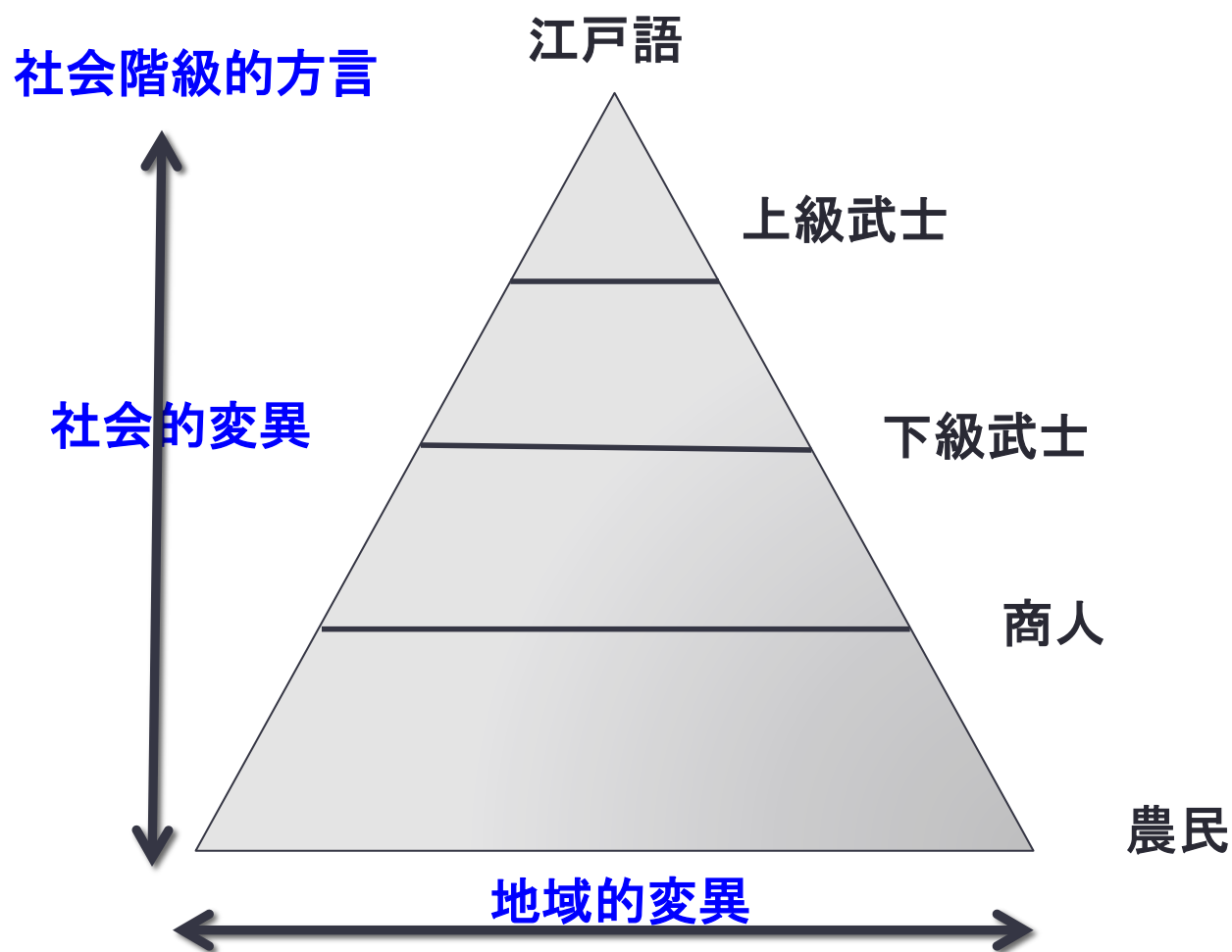
アコモデーション理論

- マクドナルド、関西ではなぜ「マクド」？
[日本経済新聞大阪夕刊いまだキ関西 2012年1月25日]
- 関西でも若者を中心に共通語としての「マック」を自然に使う人が増えているのではないか(真田)。
- 関西ではまだまだマクド派勢力は強い。
 - 堺市に住む40代のビジネスマンは「高校ぐらいからやったかなあ。ずっと『マクド』言うてますけど」という。
 - 孫のためにハンバーガーを買いに来たという大阪市内在住の70代の女性も「うちでは孫も私も『マクド』やわ」とほほ笑む。
 - 兵庫県西宮市で育ったという40代の主婦も高校時代からのマクド派。米アップル社のパソコン「マッキントッシュ」が「マック」の愛称で呼ばれていることにも触れ、「『マクドナルド』まで『マック』言うたら紛らわしいし、『マクド』でええんちゃう？」とあっけらかんと話す。

同音衝突

時空間変異

- 地域言語 (local dialect) と社会言語 (social dialect) のありよう



時空間変異

• 古い村と新しい村

- 人口1000人の村(村人は同じ言葉を話し、自分たち以外のほかの言葉を聞いたことがないと仮定)
 - 老世代は若者の言葉遣いが鼻につくと文句を言う。
 - 老世代は若者が作り出した新しい言葉が変だと非難する。
- 村が、あるとき、半分に分割される。
 - 半数の500人が「古い村」を立ち去り、川を渡り、山を越え「新しい村」を形成。
- 「古い村」と「新しい村」は完全に隔離、分断され、以後、何の接触もない。
 - この2つの村で話される言葉は徐々にだが変化していく(方言孤立変遷)。
 - しかも変化の方向は2つの村で同じではない。
 - 2つの村で、それぞれ新しい言語表現が生まれ、新しい発音が生まれる。
 - 究極的には、「古い村」の人々と「新しい村」の人々は互いに何を話しているのかすら理解できなくなる。

時空間変異

• 古い村と新しい村

- 「古い村」もやがて**上層階級**と**下層階級**に分岐し、この2つの社会階層の話し方のスタイルは変化していく→社会階級差。
- **上層階級**(もしくはそれに接する人々)は新しい知識を吸収する機会が多いが、**下層階級**(もしくはそれに接する人々)はそうした知識を吸収する機会が少ない。
- 社会階層が言語に与える影響は甚大である。
- 言葉の変化は主に**上層階級**の(書き言葉を含めた)流れ。
- **上層階級**の言葉(都ことば)が、交流の結果として、やがて地方の**下層階級**である庶民の話し言葉に流れ込む場合もある。
- 文献などに残る**書記言語**としての**上層階級**の書き言葉と、文献に残る可能性の少ない**音声言語**としての庶民層・**下層階級**の話し言葉は必ずしも同じ歴史をたどったわけではない。
- 言葉の変遷をたどるという意味で方言に注目することが**下層階級**の話し言葉の歴史的な理解を可能にする。